

〔論 文〕

オスプレイとエイサー： 戦後沖縄における民俗芸能のひろがりと米軍基地

Osprey and *Eisaa*:
The Expansion of Drum Dances and U.S. Military Bases in Postwar Okinawa

城田 愛・森田 真也
Chika SHIROTA and Shinya MORITA

1 はじめに

本論文では、戦後沖縄における、民俗芸能のひろがりと米軍基地とのかかわりについてみていく。広大な基地と隣りあわせに暮らさざるをえない沖縄の人びとが、どのように、基地の内外で、エイサーを踊ってきているのかに着目する。

エイサーとは、「主に沖縄本島、およびその周辺離島で旧暦の盆（以下、旧盆）の夜に青年男女によって行われる太鼓踊りである。男性は大太鼓、締め太鼓やパーランクーという片面張りの小太鼓を打ち、女性は手踊りで隊列を組み、集落をまわるスタイルが主流である」（森田 2015b: 61）。エイサーは、沖縄島中部を中心とし、祖先供養を目的に、各町内、地域ごとに青年会を母体とした小さな団体によって維持されてきた。参加資格は、各地の青年会のメンバーに原則、限定されている¹。

しかし、今日、エイサー演舞の機会は旧盆以外にも拡大し、地域をこえた場所やイベント、観光の現場、移民先などで演じられることも増えている（城田 2001、2010、2013など）。また、踊られる時期や地域などに限定されない創作エイサーの団体も増加し、県内外の人気を集めている。

さらに、エイサーは、基地反対や垂直離着陸航空機である「オスプレイ」²の在沖米軍

¹ エイサーについては、詳しくは沖縄市企画部平和文化振興課編（1998）、その他、琉球新報社編（1984）、宜保（1997）を参照。戦後の展開については、岡本（1998）、久万田（2011）、森田（2015b）を参照。

² オスプレイ（Osprey）とは、米軍の最新鋭垂直離着陸航空機の愛称である。ベル社とボーイング社の共同開発によるもので、海兵隊用MV22と空軍用CV22がある。2012年から、普天間基地に配備されている。左右に可動式の回転翼があるのが特徴で、ヘリのように垂直の離着陸、空中での静止、飛行機のように高速飛行もできる。輸送を主たる任務とする。通常の輸送ヘリに比べ、速度、航続距離、飛行高度、積載量とも優れているとされるが、システムが複雑で高度な運転技術も必要であり、これまでも、度々、事故を起こしている。実際、2016年12月に名護市海岸沖に「不時着水」し大破した事故や、2017年8月には岩国基地から沖縄へ飛行中のオスプレイが大分空港に緊急着陸したこともあり、安全性と騒音に対する懸念がなされている。

基地への配置反対の集会などで舞われてきている。いっぽう、在沖米軍主催の基地内でのフェスティバルや地域住民との親善行事などでも、エイサーは踊られてきている(Shirota 1999など)。後で詳述するとおり、米軍施設である「ホワイ・ビーチ地区(White Beach Area、以下、ホワイ・ビーチ)」で開催されるフェスティバルでは、オスプレイなどの軍用機の展示と、基地がある地元のうるま市勝連平敷屋に暮らす人びとによるエイサーの舞台が、同一会場内でくりひろげられることもある。

オスプレイとエイサー。軍用機と民俗芸能。一見、同じ場所にはいあわせないこの二者が、沖縄には、ともにある。沖縄の空には、オスプレイが爆音とともに飛び、エイサーは太鼓の音とともに舞う。本論文では、このような踊りの場から、沖縄特有の地域社会と米軍基地との関係性について考察していくことを目的とする。そして、マスコミや政治的観点とは異なる文化人類学視点から、「沖縄の民意」のあらわれかたの多声的状况について考えていきたい。

2 沖縄における「いくさ」とエイサー：武器を楽器に

ハイサイ こんにちは ボンジュール
えがお しずかな ハンシーメー (おばあさん)
あなたの 若い 夏の日に
いくさに 消えた むすこたち
はずむ たいこの リズムも ないて
むねに いのりを うちならす
エイサー エイサー サーエイサー
ヒヤルガエイサー スリ スリ

「反戦シャンソン歌手」として知られた沖縄出身の女性である石坂真砂³は、1981年、NHK沖縄局で放送されていた「エイサー」(石坂真砂作詞、栗原浩一郎作曲)という曲のなかで、上記のようにうたっている⁴。「いくさとエイサー」を主題にしたこの歌は、沖縄戦で息子たちを亡くした母親たちの「いのり」ともなっている。

第二次世界大戦期の1945年3月末、米軍は、空襲や海上の軍艦からの砲撃につづき、慶良間諸島に上陸した。そして、4月1日には、沖縄島中部の西海岸に上陸した。この頃か

³ 石坂真砂(1931-2003)は、沖縄県本部(モトブ)町出身、戦後、本土で俳優になるが、シャンソン歌手に転向。1972(昭和47)年、沖縄に帰り、那覇市内にライブ・ハウスを開く[<https://kotobank.jp/word/石坂+真砂-1669770>、『コトバンク』、「石坂真砂 イシザカマサゴ」、および<https://ryukyushimpo.jp/news/preentry-118473.html>、『琉球新報』(2003年5月30日)、「石坂真砂さん死去：県内シャンソン界けん引」]。

⁴ 「エイサー」の歌詞は、「ハイビジョンスペシャル 美ら島賛歌：『あたらしい沖縄のうた』を訪ねて」[2002年3月18日(月)午後6:30から126分、初回放送]から引用。「あたらしい沖縄のうた」は、1997年まで続いたNHK沖縄局の歌番組。

ら約3ヶ月にわたる戦いを、「沖縄戦」とよんでいる。この沖縄戦では、当時の沖縄県民の4人に1人が犠牲になり、その死者数は12万2000人以上とされている⁵。

終戦直後、芸能再興にたずさわった人物のひとりであった小那覇舞天（本名：全孝）⁶は、石川収容所や収容所を出て生活を再開させた直後の家々をまわり、下記のとおり、「命のお祝い」をおこなったとされている⁷。

命の助かった者たちがお祝いをして元気を出さないと、亡くなった人たちの魂も浮ばれません。4人に1人が死んだかもしれませんが、3人も生き残ったではありませんか。さあ、はなやかに命のお祝いをしましょう。（照屋 1998: 14）

米軍が設置した収容所⁸にいられた沖縄の人びとは、身の安全を確認したのち、「唄サンシン」⁹で、犠牲者と生存者たちをなぐさめた。収容所や、物資のとぼしい戦後沖縄では、胴体（共鳴）部分は野戦用食料がはいっていた缶詰の空き缶で、棹は野戦

⁵ 犠牲者数の内訳は、アメリカ側が1万2520人。日本側はその15倍、18万8136人が亡くなったとみられている。このうち、沖縄県出身以外の日本兵は6万5908人。沖縄県出身の軍人・軍属（正規の軍人、防衛隊や学徒隊など）は2万8228人、一般の住民は9万4000人とされ、沖縄県民全体では12万2000人以上とされている [http://digital.asahi.com/articles/ASJ6K43QDJ6KUEHF008.html、『朝日新聞デジタル』（2017年6月23日）、木村司「沖縄戦とは何か、深く知るためのQ&A」]。

⁶ 小那覇舞天（1897-1969）は、本業の歯科医もしながら芸能活動をつづけ、沖縄戦終結直後に、漫談などで人びとを勇気づけ、「沖縄のチャップリン」とされている [http://www.okinawatimes.co.jp/articles/-/47665、『沖縄タイムス』（2015年1月1日）、西江千尋「『沖縄のチャップリン』小那覇舞天さんのネタ帳・未発表脚本発見」]。

⁷ 音楽評論家・プロデューサーの森田純一によると、石川収容所は1945年の8月に解放され、舞天と付き人であった照屋林助（リンスケ）は、晩になると、家々を回る「マチマーイ」（まちまわり）をおこなった（森田 1998: 78-79）。

⁸ 沖縄島における米軍の保護住民数は、日本軍の組織的抵抗が崩壊したのちの1945年7月末には、32万人となった。戦闘と並行して基地建設をすすめていた米軍は、軍事施設から離れた沖縄島北部を中心に設置した民間人収容所に住民たち（civilians、略して「CIV」）を隔離した。沖縄出身者をふくむ日本兵の捕虜たち（prisoners of war、略して「PW」、または「POW」）は、金武村屋嘉の捕虜収容所に収容され、さらに一部はハワイの収容所へ送られた（鳥山 2000: 50）。

⁹ 沖縄芸能に欠くことができない楽器である三味線は、「サンシン」とよばれ、「三線」、「三弦」、「三糸線」などと書かれることもある。現在の沖縄では、「三線」とされるのが多くなっている。また、沖縄県立芸術大学で教えてきた金城厚[1999(初版1997): 43]は、「歌三線」について、「音楽的にほんとうに大切なのは、歌のほうである。沖縄の音楽は基本的にすべて歌が主役であって、三線は音程や間を取るための脇役に過ぎない。実際のところ、歌のつかない器楽曲や器楽部分はきわめてまれである。三線は歌を支えるためにある。」と述べている。

用ベッドの骨組の棒などで、弦はパラシュートをほどこいた繊維をよった糸や電話線など、廃材や米軍物資を利用して「缶空三線」がつけられた。これは、「カンカラー三線」や「缶空三線」ともよばれる。戦前は、楕円形の缶詰をもちいて、こどもの遊具用としてつけられていた。終戦直後のカンカラ三線の皮は、セロハンのような素材の「一日ガッパ」を切ったものを7枚重ねて貼ったものがもちいられた。1946年から1947年頃から1949年頃までは、パラシュートをもちいた「落下傘貼り」（または「絹貼り」とよばれていた）の皮がもちいられた（沖縄国際大学文学部社会学科石原ゼミナール編 1994: 63-64）。

終戦直後、沖縄の人びとは、エイサーも収容所でおこなった。たとえば、現在の沖縄市（旧・コザ市）の中の町（上地）に暮らしていた人びとの多くは、嘉間良に収容され、そこで、米軍の水や燃料の携行用20リットル容器である「水缶」（または「ジェリカン」）¹⁰や、3.6リットル容量の「六斤缶」¹¹を太鼓がわりに打ち鳴らし、エイサーを演舞した（沖縄市企画部平和文化振興課編 1998: 100）。六斤缶は、戦後の沖縄では、井戸の水を汲む釣瓶、加工して炊飯器、湯沸かし、食器、灰皿にも転用された¹²。この缶には、アイスクリーム・パウダーや粉ミルクが入れられたりもした。さらに、「モービル（またはモビル、=Mobile）油」¹³がはいった六斤缶もあった。また、鍋には、不発弾や戦闘機の残骸を溶かしてつくったものなどもつかわれ、戦後沖縄では、武器が、生きていくための食器に、さらには楽器へと生まれかわっていったのである。

収容所以外であっても、戦後の沖縄社会では物資が乏しく、武器をふくむ米軍払い下げ品が、生活用品としてだけではなく、楽器としてエイサーなどで再利用されていた¹⁴。現・沖縄市の池原地区の人びとも、アメリカ製の「水缶」を太鼓がわりにもちい、沖縄戦でつかわれた薬莢を鉦鼓（ソグ）¹⁵として利用していた（沖縄市企画部平和文化振興

¹⁰ 沖縄では、「水缶」（ジェリカン）とよばれる。ジェリカン（jerry can, jerry can）とは、プレス加工された2枚の鋼板を溶接して作られた水や燃料用の容器である。

¹¹ 「六斤缶」は、容量が3.6リットルで、アメリカ製の1ガロン容器と思われる。

¹² <http://www.campus-r.com/naohiko20051205.html> [『週刊上原直彦』、「連載エッセイ『浮世真ん中』(217): ダイエット太り時代・缶詰太り時代」（2005年12月29日）] を参照。

¹³ この機械用減摩油は、エンジンオイルと油圧オイルがあった。戦後、食用油がなかった時代、沖縄の人びとは、鉄兜（かぶと）を鍋にして、この機械油で「モービル天ぷら」を揚げて食べ、はげしく胃腸をこわしたり、命を落とす場合もあった（沖縄タイムス社編 1998: 32-37）。

¹⁴ 1958年にコザ（現・沖縄）市長となり、4期つとめた大山朝常（チョウジョウ）は、自身も幼いころから三線を弾いており、「床の間に刀を飾るヤマト[日本本土]、三線を飾るウチナー」といい、「かつてのヤマトの家では、床の間に刀、日本刀を飾っておりました。床の間は家の中心、一番大事なところで、沖縄にもあります。しかし、人を殺傷する武器である刀をそこに飾るような家は、沖縄にはありません。沖縄の家に飾るのは三線、つまり三味線です」（大山 1997: 31）と述べている。

¹⁵ 「鉦鼓」とは、祭りや綱引きに使われる打楽器で、たんに、「鉦(カネ)」ともよばれる。真鍮（しんちゅう）や青銅で作られている。かつて、念仏者が、葬式や法事で打つ時にも使っていた [<https://www.city.okinawa.okinawa.jp/about/1818/1846>, 沖縄市ホームページ、沖縄市立郷土博物館、「今週の一品」（2008年10月14日更新）、「鉦鼓（ソグ）」]。

課編 1998: 147)。また、嘉手納基地に、集落のすべてが接收されてしまった千原のエイサー保存会の花城康次郎会長（1995年当時）は、終戦後、「アメリカ製の食器」¹⁶や、「一斗缶（オイル缶）」¹⁷を半分に切ったものを太鼓がわりに叩いていたと回想している（沖縄市企画部平和文化振興課編 1998: 317）¹⁸。

さらに、終戦直後、沖縄の人びとは、米軍払い下げの軍服も、エイサーの衣装として着用した。たとえば、1947年、1948年頃の現・沖縄市の明道地区^{アケミチ}一帯には、収容所があり、戦後に発足した明道青年会と故郷に帰れない人びとが、一緒にエイサーを踊った。そして、これが、この地域での戦後エイサーの再開とされている。この復活当初、明道エイサーの衣装には、米軍払い下げ品であるカーキ・シャツ、カーキやラシャのズボンが利用されていた（沖縄市企画部平和文化振興課編 1998: 139-140, 342）。また、終戦直後、現・沖縄市の安慶田地区では迷彩服、同市の諸見里では野戦服、山里では米軍払い下げのカーキ・ズボン、宮里地区では米軍払い下げのズボンと靴などを着用して踊った（沖縄市企画部平和文化振興課編 1998: 339-341）。

以上、沖縄戦と戦後エイサーの展開について概観した。戦後のエイサーは、いのりであり、慰霊でもあった。いくさを生きぬいた沖縄の人びとは、武器をはじめ、米軍物資の食器や容器を楽器にかえ、軍服を踊りの衣服^{がつら}にかえ、エイサーを舞った。役者の存在をはじめ、舞台の設置、役ごとの衣装、化粧、髪などを必要とする沖縄芝居と比較すると、エイサーは身近にある物で、身軽に演舞することができた。さらに、個人ではなく、集団で演舞するエイサーは、離散していた同郷の人びとを再結集させ、青年会などを結成させる原動力ともなっていたのである。これらの点が、「いくさとエイサー」の関係としてあげることができる。

なお、1945年8月、石川に、米軍政府の諮問期間として、沖縄諮詢会^{しじゅんかい}が発足され、そのなかの文化部のメインとして、芸術課がもうけられた。その初代課長には、前述の舞天（小那覇全孝）が就任した。琉球王朝時代の「踊り奉行」^{ウドウイ}の生まれかわりとされた芸術課の事務分掌には、「演劇、舞踊、音楽の指導奨励と公演、興行の監督に関する事項」がふくまれていた。そして、ここの予算は、米軍政府から支給される第二次世界大戦後のアメ

¹⁶ 米軍で使用される「メス・トレイ(mess tray)」は、銀色で、ステンレス製、縦が約30センチ、横が約40センチの長方形である。

¹⁷ 「一斗缶」は、ブリキ製で、長方体の18リットル容量の缶。「石油缶」ともよばれていた。花城康次郎千原エイサー保存会会長（2016年当時）は、「一斗缶」や「オイル缶」とよんでいたと話してくれた（2016年2月21日）。

¹⁸ 千原郷友会第五代目会長（1966年から1968年）、および千原エイサー保存会会長を長年つとめてきた花城康次郎氏は、「道の駅かでな」3階の学習展示室で上映されているビデオ映像「千原エイサー」（2003年度制作、企画：嘉手納町）のなかでも、実際に米軍で使われているステンレス皿を持ち、説明をしている。このビデオの最初と最後は、基地をとりかこむ金網のフェンスを、千原エイサー保存会の踊り手と地謡たちが、行き来するように映像が加工されている。この千原エイサー固有の戦後史を象徴している衝撃的なシーンから、拙稿（森田・城田 2017）のタイトルを設定した。

リカの占領地統治救済資金である「ガリオア援助資金」¹⁹から出ていた（川平 1997: 52-53）。

1952年には、戦後における沖縄の政治や文化、経済の復興の中心地であった石川で、「米琉親善盆踊り大会」が開催され、1万人をこす人びとが集まった²⁰。この大会は、1956年に第2回目、1960年に第3回目が開催されるまで続いた（岡本 1998: 54）。

このように、終戦直後から、米軍は沖縄を統治するうえで、日本本土とは異なる「琉球文化」の独自性を強調し、奨励した。アメリカと沖縄との関係性は、「沖米」や「米沖」ではなく、「琉米」や「米琉」という表記がもちいられた。これらは、沖縄の円滑な統治を目的とした、米軍による日本との分離、いわゆる「離日政策」の一環といえる（森田 2015a: 144）。

戦後、エイサーをはじめとする沖縄の芸能は、米軍の制度下・庇護下で、復興、発展をすすめていった。実際、当時、エイサーを演舞していた人びとは、ごく身近にある米軍の物資をもちいながら、唄い、踊った。戦後の米軍統治という強固な社会制度上の枠組があるなか、沖縄の人びとは米軍の払い下げ品などを柔軟に流用し、着用しながら、パフォーマンスをくりひろげていった。このように、当時の楽器や衣装にも注目したエイサーの踊りの場から、「物が語る戦後史」を読みとることもできる。

3 沖縄の地域社会と米軍基地：平敷屋における米軍港「ホワイ・ビーチ」

ここから、具体的に平敷屋におけるエイサーの事例を中心に、戦後のエイサーのひろがり、さらには地域社会と米軍基地とのかかわりについて考察していく。

まず、平敷屋とその近隣地域における軍事基地についての概略を述べる。現在、平敷屋が属する「うるま市」は、沖縄島中部に位置している。2005年4月1日に、具志川市、石

¹⁹ ガリオアとは、GARIOA (Government Appropriation for Relief in Occupied Area)のことで、占領行政の円滑化をはかるのを目的とした、第二次大戦後、アメリカ政府が占領地における疾病や飢餓などによる社会不安を防止するために支出した援助資金。

²⁰ 『石川市史』によると、当時、石川市役所総務課長であった棚原勇吉は、この頃の石川市は、「全琉的な会合、スポーツや諸行事のメッカであった」といい、下記のとおり、1952年の「盆踊り大会」をふりかえっている：

昭和27年9月5日から3日間、市主催「石川盆踊り大会」を催し、従来の盆踊りとは趣をかえ、石川中校校庭に一丈あまりのやぐらを立て2・3万人の人々が参加して華やかな楽しい盆踊りであった[後略]。

〔伊良波長幸〕市長や瀬良垣宗十、小那覇全孝、平良良勝、中村永秀の諸氏が中心となり、小那覇全孝先生指導下で、①在来踊りは、久高マンヂース、すーりあがりのほか4曲、②変曲〔原文ママ〕は、安里屋ユンター、浜千鳥。③沖縄スクエアダンスとして中作田節、鳩間節、④日本舞踊はトンコ節、佐渡おけさ節などであった。（棚原 1988: 1080）

この盆踊り大会が、「米琉親善盆踊り大会」の初回であったのかどうかは、現時点では確かではない。しかし、当時のエイサーが「盆踊り」と称されて、櫓が設置されていた様子、中心的な実行メンバー、実際に演舞されていた曲名、観客数が具体的に記述されていて参考になる。

川市、勝連町、与那城町が合併して発足した新しい市である。2017年5月現在、5万656世帯、人口12万2662人、町域の約7.1%が米軍基地である。

平敷屋は、1908（明治41）年に、現在の字名となり、「勝連村字平敷屋」となった。そして、1980（昭和55）年の町政移行により、「勝連町字平敷屋」となる（平敷屋字誌編集委員会編 1998： 3）。現在は、行政上、「うるま市勝連平敷屋」である。平敷屋の人口は、2017年10月時点で、1483世帯、3580人となっている²¹。

平敷屋に隣接している米軍基地のホワイト・ビーチは、勝連半島の先端部に位置し、勝連平敷屋と与那城饒辺にまたがる、総面積156万8000平方メートルの軍港である。主として管理するのは在沖米海軍艦隊活動司令部で、軍艦の寄港する港湾施設、宿舍、管理事務所、貯油施設、ミサイル・サイトなどがある²²。

米海軍と陸軍のふたつの大きな栈橋があり、主たる寄港艦船は、ヘリ空母、揚陸艦、原子力潜水艦、兵員輸送専用艦、タンカーである。隣接する海上自衛隊沖縄基地の共同使用により、海上自衛隊船舶も寄港している。常時、水域および空域での演習訓練の際の兵員の輸送、武器・弾薬などの軍需物資の補給基地として活発な運用がなされ、とくに原子力潜水艦が入港可能という軍事戦略上の性質から、在沖縄米軍のきわめて重要な軍港として機能している（沖縄県総務部知事公室基地対策課編 2013： 270-273）。そのため、嘉手納飛行場と同様に、返還の話はでない。

過去、付近から平均値を上回る放射線量が記録されたこともあり、原子力潜水艦の頻繁な寄港は、近隣住民に不安を与えつづけている。また、普天間基地へのオスプレイの配置後、ヘリ空母の往来も確認されている。

このような危険や負担の引き換えとして、うるま市には、国からの各種の交付金と軍用地料が落とされ、かつての宅地や農地を接収されている個人・団体の軍用地主には、年間賃借地料が支払われている。ホワイト・ビーチの軍用地主数は1505、年間賃借料の総額は10億6000万円である（沖縄県総務部知事公室基地対策課編 2016： 14-15）。

戦前、平敷屋の人びとは、麦などの畑作を中心とした半農半漁をいとなんでいた。旧集落は、現在とは異なるホワイト・ビーチ寄りの場所にあった。戦中、平敷屋の住民たちは、一時的に平安名、南風原に疎開していた。その間、旧集落は米軍に軍用地として接収され、戻ることが不可能となった。1946年、琉球列島米軍政府から名護原、後原の耕作を許可された。翌年、土地と宅地配分を実施し、住宅も建築されるようになり、平安名、南風原からの人びとの移動が完了した。新集落は、かつての耕作地であった名護原一帯、浦力浜に至る傾斜地帯に形成された（平敷屋字誌編集委員会編 1998： 4）。

²¹ <http://www.city.uruma.lg.jp/userfiles/U020/files/gyousei1710.pdf> [うるま市、「市政・財政・議会・選挙・統計・基地・公売等」、「うるま市の紹介」、「うるま市の人口と世帯数」、「行政区別人口統計表」（平成29年10月31日現在）]を参照。

²² <http://www.city.uruma.lg.jp/shisei/167/508/1750> [うるま市、「市政・財政・議会・選挙・統計・基地・公売等」、「基地政策」、「うるま市における基地の概況」、「ホワイト・ビーチ地区（FAC6048 White Beach Area）」]を参照。

かつて、地元の人びとから、「^{メーヌハマ}前の浜」²³とよばれていた青い海がひろがる風光明媚な白い砂浜は、沖縄戦後、「White Beach」として、平敷屋の旧集落を飲みこむ形で、軍港として整備されていった。戦後の混乱期、平敷屋の人びとは、自らの意思とは別に、土地を接収され、移動を余儀なくされたのである。

4 平敷屋におけるエイサー

4-1 歴史と概要

平敷屋エイサーの起源は、あきらかにはされていない。かつて、字平敷屋では、旧暦の七月十五日、先祖の霊を送り終わった頃、若者たちが、村の神屋で、きわめて簡単な振り付けのエイサーを踊っていた。その後、集落内の道を練り歩きながら、家庭をまわり、無病息災と一家の繁栄を祈願するために、うたと三線で踊り、酒をもらって、それを水で薄めて売り、ほかの経費などに充てていた、といわれている（徳山 1958；平敷屋字誌編集委員会編 1998：187）。

1904（明治37）年頃の沖縄では、名護の世富慶^{ヨフケ}のエイサーがもっとも評判がよいとされ、当時の平敷屋青年団の団長と踊り好きの団員数名が名護に見学へ行ったといわれている。そして、名護のエイサーを参考に、パーランクー打ちや手踊りなどの研究を重ね、振り付けをアレンジしていき、これらが平敷屋エイサーの原型となったとされている（平敷屋字誌編集委員会編 1998：187）²⁴。

しかし、名護には、平敷屋エイサーのような踊りは、今は存在していない。ただし、平敷屋のエイサーには、戦前から、「名護人やてから裏座んかい・・・」との唄で踊られているため、名護からはエイサー唄だけをとりにれたのではないかという説もある。また、それ以前に、名護から来たという仏壇の漆塗り職人から教えられたものが原型であるといった諸説がある（平敷屋字誌編集委員会編 1998：187）。

平敷屋エイサー保存会が、1999年に実施した世富慶での聞きとり調査およびビデオ視聴による演舞比較の結果、両者には類似点はあるものの、その違いは顕著であり、とくに、平敷屋エイサーの大きな特徴である「テークチリ」（太鼓打ち）の技と衣装は、世富慶エイサーとはまったく異なったものであるとされた。双方のエイサーは、それぞれの特徴が異なり、大きな類似点がみあたらないことから、「平敷屋エイサーが世富慶から習い伝わったという説には懐疑があると言わざるを得ない」、という結論を出した。そして、以下のように、調査結果をまとめている：

²³ 名嘉山（2012: 11）を参照。

²⁴ 平敷屋から、エイサーを習いに来たとされている1904（明治37）年頃の世富慶は、山原（ヤンバル）船の寄港地（許田、名護湾）であったことから、木材などを買い求める大勢の行商人が来ており、首里や那覇で流行した唄を、この地にいち早く持ち込んだのではないかとされている。平敷屋エイサーには、戦前から、「我身や名護人やだやびる」とうたう、「二合小（ニンゴウグラー）節」という曲があるが、近隣のエイサー唄にも、同様の歌詞があることから、この唄は、当時の流行歌であった可能性が高いと思われる（平敷屋エイサー保存会 2002: 9, 15）。

平敷屋エイサーの特徴は、黒と白を基調とした僧侶^{ママ}の袈裟に例えられる“すがい”[装束]とテークチリの踊りであり、そのすがいとテークチリの型は手踊り主体である世富慶や名護の他地域のエイサーとは全く異なっていることから、明治36年7月[正しくは37年6月]に兼堅助志氏らが名護から習ってきたエイサーは、エイサー全般やテークチリのすがいや技ではなくエイサー唄（曲）であると考えてるのが合理的である。また、平敷屋エイサーのすがいやテークチリの型などは他のエイサーとは全く異なる平敷屋独特のものであることから勘案するに、平敷屋エイサーはエイサー好きな先人らが、僧侶の装束を参考にして独自に編み出したものであると考えることが出来る。しかし、いつ、誰が、どのようにして現在の平敷屋エイサーを創作したかについては、今後更に地道な調査が望まれる。（平敷屋エイサー保存会 2002: 17-18）

1925（大正14）年に青年会長に就任した徳山実によって、1958年に書かれたとされる「盆踊りエイサーの由来と其の型・形態および歌詞」によると、1914（大正3）年まで、エイサーは年中行事のなかで、もっとも青年に喜ばれてきたものであった²⁵。だが、その翌年、第一次世界大戦の影響で、村役場から、エイサーなども禁じられてしまった（徳山1958）。

そして、徳山は、1925年に、「旧の七月の盆になると他府県でも盆踊りはして居るから沖縄でもしても良くないかと思ひ」、エイサーを復活させた。10年ぶりに再開されたエイサーは、西と東の二組に分かれて、猛練習がつまれ、しだいに平敷屋エイサーは盛大になっていった（徳山 1958）²⁶。

現在みる平敷屋エイサーの大きな特徴のひとつは、同じ集落内に東西ふたつのエイサーが存在することである。1地区に、2種類のエイサーがあり、青年会が東西に明確に分かれて演舞しつつづけてきているのは、管見のかぎり、平敷屋だけである。東が「男性的で活発な踊り」、西は「女性的で優雅な踊り」とされ、それぞれ個性がはっきりしている。同じ集落であっても、とりわけ、エイサーに関しては東西でつよい対抗意識があり、昔は、「技が盗まれる」と言^{ミヤギシウセイ}って、練習しているところを絶対に相手にはみせなかった。平敷屋エイサー保存会の宮城松 生名誉会長が青年団だった頃、最初は西で踊り、途中から引越して東へ移った際、先輩たちから「踊りが違うから西へ戻れ」と言われたという。「現

²⁵ 徳山実は、1902年平敷屋生まれ、戦前、平敷屋青年団長、戦時中は熊本へ疎開、戦後は1947年に平敷屋区長などをつとめた。平敷屋エイサー保存にも深く関心を持ち、その由来記を書き残している（平敷屋字誌編集委員会編 1998：411）。

²⁶ かつて、平敷屋では、拝所を中心にして、集落を南北にわけて、旧六月二十四日におこなう「道ズネー」や、「タコ綱引き」やエイサーもおこなわれていた。その後、理由はあきらかになっていないが、従来の南北組みから、東側（アガリディー）と西側（イリーディー）の両側に組が編成替えになった。拝所を中心とする境界地点は変わることなく、道ズネー、タコ綱引き、エイサーの組み分けの線引きが変わったとされている（平敷屋字誌編集委員会編 1998：181）。

在、平敷屋のエイサーが芸術性などで高く評価していただけているのは、2つのエイサーがずっと技を競い合ってきたことも理由のひとつだと思います」、と宮城は語っている²⁷。このように、東西に厳密に分かれて演舞する、地域内での拮抗性が、平敷屋エイサーの特性のひとつで、質の高さを保持しているといえる。

戦前、エイサーの練習は、旧七月七日のタナバタの夕方から、東青年団は中道（現在の慰霊碑の東側）で、西青年団は闘牛場（ウシナー、現軍用地内）でそれぞれ練習をおこなっていた。戦後は、旧六月の初旬頃から、東側は平敷屋小学校グラウンドで、西側は公民館広場でおこなっている（平敷屋字誌編集委員会編 1998：188）。

戦前から現在にいたるまで、平敷屋エイサーは、25歳以下の青年たちでおこなわれてきている。戦前は、男性だけで演舞され、手踊りも男性のみが、男役と女役に分かれて演じていた。しかし、戦後になると、女性も手踊りに参加するようになった。現在、青年会のエイサーは、男性は16歳から25歳までの10年間、女性は22歳までの参画となっている。なお、平敷屋には、エイサー団体として、青年会以外に、「平敷屋子ども会育成会」と、後述する「平敷屋エイサー保存会」がある。

青年エイサーの演者たちの構成は、パーランクー（かめ）を手にした「テークチリ」（太鼓打ち）を中心に、二人一組で大きな甕（かめ）を担ぐ「ハントー（酒甕）担ぎ」や、手踊りの「ヂーヌー」、道化役の「ナカワチ」、うた・三線を担当する「地方・地謡（シカタ・シラヂー・ジョウ）」という総勢70名前後のメンバーで演じられる。ハントー担ぎは、エイサーの一団を先導して入場する。甕を担いでいるのは、戦前、集落の家々を回って踊った際に、「お布施」として酒をもらっていた頃の名残りである。ナカワチは顔を白く塗り、踊りの合間に滑稽な余興を演じ、メンバーに水を配ったり、うちわであおいだりして仲間の世話をする。近年は、東西の青年会を表示するための旗頭が先導している²⁸。子ども会と青年会のエイサーでは、ジェンダー規定が固定化されており、太鼓打ち、ハントー担ぎ、ナカワチ、地方・地謡、旗頭を担当するのは男性だけに限られている。なお、現在、保存会の手踊りは、男性の人数が少ないため、女性たちが、男役（男装して）と女役に分かれて演舞している。

平敷屋エイサーの最大の特徴は、踊りが整然としているところだとされ、下記のように言及されることが多い：

太鼓打ちの一糸乱れぬバチさばき、太鼓の返し、胴体のひねり、腰のおろし具合、交差させる足の運びなど群舞で美しく見せます。また、一列縦隊の行列を組んで入場し、一列から二列、二列から四列へと隊形を変えながらの演技は、静から動へ、動から静へと変化に富んでいて、古典的かつ躍動感に満ちています。こ

²⁷ <http://www.dydo-matsuri.com/archive/2011/eisa/>（ダイドードリンコ、『日本の祭り』、「これまで応援した祭り」、「2011年の平敷屋エイサー」）を参照。

²⁸ 同上、および、平敷屋字誌編集委員会編(1998：187-188)を参照。

うした特色のすべてが昔ながらのエイサーを継承しているといわれるゆえんです。実際にご覧いただいたら一連の演技の中から湧き出る強弱の調和のとれた迫力、内に秘められた奥ゆかしい情熱、魂を揺さぶるエネルギーを感じとっていただけだと思います²⁹。

衣装に関しては、戦後、沖縄のエイサーの多くが、観客にアピールすることに力点がおかれ、派手になっていった。しかし、平敷屋エイサーは、伝統的なスタイルをつらぬき、古くからの型を守りつづけている。主役のテークチリたちの衣装は、白の襦袢に黒染の緋、黒帯、蝶結びの白鉢巻、袖丈を上げる白タオルと簡素で、足元は裸足となっている。これは、「僧侶あるいは野良仕事の農民の姿を表したもの」だといわれている³⁰。

エイサーがとりおこなわれる旧七月十五日の「ウークイ」は、盆の最終日であり、先祖の霊を送る日にあたる。この日、踊る場所は、「ヒッチャマァー」³¹とよばれる拝所の前にある広場で、例年、夕方6時半頃からスタートし、東西の青年たちが、それぞれ約2時間ずつ踊る³²。なお、沖縄戦で、1932年に竣工された拝所は消失してしまい、戦後、その跡地は軍用地にとりこまれてしまったため、拝所の場所が移動されている。

戦後、疎開先から戻ってきた平敷屋の青年たちは、地域住民たちからのつよい要望もあって、1948年にエイサーを復活し、今日まで踊り継いできている。戦後、地謡は5から6名、太鼓打ちは20数名に増え、手踊りには若い女性たちが緋の着物と草履で参加するようになり、エイサーを踊る構成人員は、東西とも80余名と増員され、その規模は1998年頃ま

²⁹ <http://www.dydo-matsuri.com/archive/2011/eisa/>（同上）を参照。

³⁰ 同上。なお、衣装などにおける東西の区別としては、「東」と「西」が記された旗頭をはじめ、ハントー担ぎの羽織りでは、東は背中に大きく「東」と印字された光沢をおびた水色の羽織りを着用し、西は「西」と印字された光沢をおびた白の羽織りを着用している。テークチリの衣装では、背中の白いタオルの結び目を、東は蝶が羽を広げたような形で内側に丸みをもたせており、西は縦長の長方形のままとなっている。女性の手踊りの鉢巻では、東は黄色、西はピンクとなっている。地謡が三線を肩から吊り下げる布でも、東は黄色、西はピンクとなっている。ナカワチでの区別としては、両者ともに白の長袖と長ズボンの上下であるが、近年、東はカラフルな女性用浴衣をその上に羽織り、西は揃いの黄土色に黒い縦縞がはいった着物（芭蕉布を模したもの）を羽織っている。

³¹ 拝所[殿元（トウヌドゥ）、神屋（カミヤー）ともよばれる]には、共同体の神がまつられている。現在のものは、1983年に建立され、拝殿はコンクリート造りで、屋根は赤瓦葺き、正面入口には鳥居がある。毎年、旧七月十五日には、ウスデークとエイサーの奉納がおこなわれている。戦前は、例年、旧六月十四日と二十四日には「タコ[蛸]綱」引きも拝所前でおこなわれていた（平敷屋字誌編集委員会編 1998：169）。この鳥居は、ペルーへ移民した「ペルー在出身者同志会」からの寄付金（18820ソール、約690ドル）によって、1967年に建てられたものであり、建て替えの際、現在の場所へ移築された（平敷屋字誌編集委員会編 1998：309）。

³² 筆者たちが、実際に拝所前でのエイサーを調査したのは、2013年8月21日（西が先に演舞）、2015年8月28日（西が先）、2016年8月17日（東が先）である。

では続いていた（平敷屋字誌編集委員会編 1998： 188）。なお、2016年現在、東西ともに40から50名に減っている。

平敷屋エイサーは、戦後の再開から5年後の1953年、旧七月十一日に那覇高校グラウンドで実施されたはじめての「全島[全琉]エイサーコンクール」³³にて優勝をかざった。この大会審査での講評によると、「他のチームより人数（およそ90人）は少ないが、昔からのエイサーを演じ、技の芸術性の高さと整然とした隊形によるものであり、高く評価する云々」とされた（平敷屋字誌編集委員会編 1998： 189）。

1952年から1954年頃に放映された「琉球ニュース」のモノクロ映像には、当時の平敷屋エイサー演舞の様子がうつっている。その貴重な動画にうつっているテークチリたちは、白襦袢ではなく、白の長袖ワイシャツの上に濃紺の着物を羽織っており、足元はくるぶし丈の黒足袋に藁草履のようなものを履いて踊っている。ハントー担ぎは素足に藁草履、女性の踊り手たちの頭は白いタオルでの「姉さん被り」となっていた³⁴。演舞をしていたのが、グラウンドのような場所で、大勢の観客もうつつていることから、上記の1953年頃の「全島エイサーコンクール」での映像と思われる。現在、平敷屋エイサーの衣装は、「昔からの伝統的なスタイル」といわれることが多いが、この映像が撮られた時代は、他の地区のエイサーと同様に、洋服のワイシャツを着用していたのである。

平敷屋エイサーは、1956年からコザ市（現・沖縄市）で開催された「エイサーコンクール」においては、第1回目から参加し、1958年の第3回目をはじめ、1964年の第9回目から1966年までの3年間は連続優勝をしている（沖縄市企画部平和文化振興課編 1998： 349-350；平敷屋字誌編集委員会編 1998： 452）³⁵。

コザでの「エイサーコンクール」の1963年の第8回目から、共催者に琉球新報社がくわり、コンクールの実施日までに、出場チームの紹介記事を掲載している。1963年のコンクールでは、東西が抽選をおこない、どちらかが出場するという趣向で、両者の紹介記事が、下記のとおり掲載されている：

「エイサー自慢（4）平敷屋西青年会：素朴な隊列の調和 ことしから新企画も」
 ・・・・いくら伝統と素朴さを“ニシキの御旗”にしても若い青年たちのシャープな感覚はつい口ずさむ軽快なリズムの民謡に走りがち。民謡の“ひやみかち節”と“でいご音頭の”が十八番というのもうなずける。こうした思想を反映したが、最近、曲節は新しいもの。紺地姿（クンジー）の衣装やおどりの動

³³ 徳山（1958）によると、1954年と1956年の「全琉球のエイサーコンクール大会」に参加して、平敷屋が一等賞を獲得した、とある。なお、『嘉手納町 千原誌』には、1953年の大会は、「全琉エイサーコンクール」と記載されている（千原誌編集委員会編 2001: 230-231）。

³⁴ 「新九州遺産 魂を受け継ぐ平敷屋エイサー」[2012年4月1日（日）午前5時45分から50分間、RKB毎日放送、RBC制作]を参照。

³⁵ 1964年の第9回と翌年の第10回目のコンクールには、西の青年会が出場し、優勝をかざっている（沖縄市企画部平和文化振興課編 1998: 349）。

作、隊列、入退場の曲節など基本的なものは古いものでいこうとする新旧折衷型の新スタイルのエイサーが生まれつつあるという。

今年はこの新スタイルを生かして民謡の“でいご音頭”をおどりながら、“（平）”の人文字を描く新企画が考えられている。これは“平和”と平敷屋の“平”を意味するもので外円の輪が平和の“和”をあらわす。エイサーで永遠の世界平和を祈ろうというもの。

“平和”の人文字は太鼓打ち二十八人で“平”の字を書き、手おどりが輪を作る。青年たちはこれが西青年会の自慢ですと自信たっぷりでおどりの手を休めようともしない。（後略）（『琉球新報』、1963年8月31日、土曜日、6頁）³⁶

「エイサー自慢（3）平敷屋東青年会：古い形とどめる テンポの早いのも特徴」

・・・・・・四年前[1959年]、同青年会の吉野勇吉さんが東青年会の盆おどりエイサーのために作詞作曲したという“ひめゆりの歌”がその後エイサーにはなしてはならないものとなって今年もこれを披ろうするという。おどりながら“ひめゆり”の人文字を描く。隊列の調和を乱さないで人文字を描くのは相当の技能を必要とする。全体的なおどりの美的な編成が尊重される集団舞踊のエイサーでは高等技術だといわれる。（後略）（『琉球新報』、1963年8月30日、金曜日、6頁）³⁷

以上のとおり、平敷屋西の青年会が「平和」とかけて「平」を、東が「ひめゆり」の人文字をえがくように隊列を工夫し、演舞をおこなった。踊りを競いあうコンクールで、審査員や大勢の観客の前で、「みせるもの」として、当時、このような平和祈願や沖縄戦犠牲者の鎮魂をアピールするような演出をおこなったのである³⁸。

1963年前後における沖縄と日本、日米関係、国際状況を概観すると、1960年代には、米軍によるベトナム戦争が激化していった。在沖米軍基地から、多くの爆撃機や戦艦、そして大勢の米軍人たちがベトナムへむかった。米軍は国際的にも批判をあび、大きな転換をせまられていた。その結果、ベトナムの北爆を停止した。そして、この頃から、沖縄の日

³⁶ 岡本（1998: 58）を参考。

³⁷ 岡本（1998: 58-59）を参考。

³⁸ 当時の『琉球新報』には、1959年に作詞作曲されたとあるが、1958年（7月30日付け）に書かれたとされる徳山（1958）の巻末に、「姫百合の歌」の歌詞が記載されており、次のとおりとなっている。「1、国ぬ為とむて 育てたるなし子 今や姫百合ぬ はての碑もん 2、生きること思て にぶる目んねらん 肝や姫百合ぬ お側守て 3、戦世ぬなれや あたら姫百合ん 咲ち出らん内に 散りて 行ちゆさ」。

本への返還が、日米間で政治的にとりあげられるようになっていった³⁹。

また、1960年には、沖縄教職員会、沖縄県青年団協議会、沖縄官公庁労働組合協議会が世話役となり、超党派的な「沖縄県祖国復帰協議会」が組織された。その後、「祖国復帰運動」が活発におこなわれていくこととなる⁴⁰。

そのような状況下、1963年3月には、当時のキャラウェイ (Paul Wyatt Caraway) 琉球列島高等弁務官が、「沖縄が独立しないかぎり自治とは神話であり、日本に復帰してもその法的制約を受ける」という趣旨の「自治神話論」を演説した。この米国政府による直接統治をうかがわせるような発言は、沖縄住民に大きな衝撃を与え、反発をまねいた⁴¹。

このような沖縄と日本、そしてアメリカ、世界情勢が揺れ動く1960年代の情勢のもと、平敷屋青年会も、当時の平和・反戦運動からの影響をうけていたと思われる。しかし、1963年度のコンクールで優勝したのは、園田青年会であった。審査員には、米軍関係者もふくまれており、「平」や「ひめゆり」という日本語の文字を人文字であらわした演出では、優勝とまではいかなかったのではないかと推察する。

平敷屋青年会のエイサーは、1964年からは3年連続優勝を飾り、1967年（第12回）は特別出場し、1972年（第17回）にも「全島エイサーコンクール」に出場したが優勝はのがしている。その後、1973年9月2日、奥武山陸上競技場でおこなわれた沖縄青年団協議会と沖縄タイムス社共催の「エイサーコンクール」においては優勝をしている。また、1981年4月12日、東京の中野サンプラザホールで開催された「第4回 日本の民謡北から南から」における戦没者遺骨収集促進基金のチャリティー公演に、全国から20種目の各県代表が出演し、沖縄県からは平敷屋青年会のエイサーが代表として出演した。そして、1991年の「九州民俗芸能大会」には、沖縄県代表として出場した（平敷屋字誌編集委員会編 1998：189）。

4-2 平敷屋エイサー保存会

平敷屋エイサーは、既述のように、ひとつの集落内の青年会が、東西ふたつの組に分かれ、それぞれの演舞に特色を出す工夫を重ねてきている。さらに、青年会を終えた演じ手たちが、平敷屋エイサー保存会にはいり、さまざまな活動をおこなっていることも特筆に値する。

平敷屋エイサー保存会（以下、保存会）は、1983年に結成された。「自分たちの郷土の伝統を知り、時代に合わせた工夫をしていく流行を追うよりも伝統を追う（守る）ことの方が、これからも一番大切だ」とし、「永い伝統を持っている平敷屋エイサー娯楽の向上

³⁹ <http://rca.open.ed.jp/history/story/hisindex5.html>（沖縄県立総合教育センター、『琉球文化デジタルアーカイブ』、「沖縄の歴史」、「戦後沖縄」、「大衆運動の高揚と沖縄返還」、「立ち上がる民衆」）を参照。

⁴⁰ 同上。

⁴¹ 同上、および、琉球新報社編（1998: 197）を参照。

に寄与しよう」という志のもと、発足された。結成以来、同保存会では、「平敷屋エイサーを正しく保存するため、青年エイサー（満25歳まで）を終えた経験者たちの入会を望んで」いる。そして会の目的であるエイサー娯楽の向上につとめるため、毎年、発表会を催し、とくに町主催の文化祭にも出場し、東西エイサーのよさを披露するなど、他団体との交流を図るほか、会員相互の親睦を密にしている（平敷屋字誌編集委員会編 1998：193-194）。

会員数は、1998年時点では約50名であった（平敷屋字誌編集委員会編 1998：193）。また、2013年の「結成30周年記念式典・祝賀会」のプログラムに記載されている会員数は35名で、演舞者たちは、「地謡（男性2名）、メーワチ（男性2名）、テークチリ（男性12名）⁴²、男役のジーヌー（女性5名）、女役のジーヌー（女性5名）」の合計26名であった（平敷屋エイサー保存会 2013）。2016年現在では、名簿上では約50名であるが、実際に活動しているのは約30名で、イベントには約20名が参加している⁴³。なお、青年会も保存会も、昔から、人数は東のほうが多いが、保存会ではとくに東西の区別はつけずに演舞しているという。

同保存会の運営資金は、区からの補助金、寄付金、その他の収益金などでおこなうことになっている。保存会は、地元や沖縄県内の芸能イベントへの出演にくわえ、県外や海外などへも積極的に出向き、これまでの主な演舞や受賞などの実績は、以下のとおりとなっている。

1985年の「第4回大韓民国平和統一文化祭」および「第19回アジア平和芸術祭」、1990年の第1回目と思われる「ホワイビーチ・カーニバル」および奄美大島での「道の島芸能交流会」、1991年の「ホワイビーチ・カーニバル」、1996年の環境庁「残したい日本の音百選」認定、1997年の鹿児島県指宿市の「民俗芸能祭in指宿」、1999年の「勝連町無形民俗文化財」（2005年からは、うるま市）指定、2000年の福島県「いわき市伝統芸能フェスティバル」および「第15回国民文化祭inひろしま」、2001年の「沖縄県文化功労者賞」受賞、2003年のハワイ遠征「第1回世界のウチナーンチュ会議inハワイ」および「オキナワン・フェスティバル」⁴⁴、2011年の九州国立博物館と2012年の沖縄県立博物館での「琉球と袋中上人展：エイサーの起源をたどる」などとなっている（平敷屋字誌編集委員会編 1998：194；平敷屋エイサー保存会 2013）。

既述の同保存会の「30周年記念式典・祝賀会」の冊子によると、芸能行事だけではなく、2009年10月には、地元にある高齢者むけのデイサービスセンター「平安郷」での「エイサー慰問公演」もおこなっている。また、2011年の9月には3ヶ所で、2012年の1月から

⁴² テークチリは、四人一組で演舞するフォーメーションがあるため、つねに4の倍数で構成されている。

⁴³ 2016年8月18日、仲尾清治平敷屋エイサー保存会会長との対話から。

⁴⁴ 同保存会は、2003年9月2日、本会議（the 1st Worldwide Uchinanchu Conference）の閉会式として、ハワイ大学マノア校グラウンドで開催された、「国際エイサー祭り(International Eisa Festival)」、そして、9月3日の第21回「オキナワン・フェスティバル」で演舞をおこなった。

10月までの間に計7ヶ所で、2013年は6ヶ所で「エイサー慰問公演」を実施している（平敷屋エイサー保存会 2013）。

これは、60歳代から70歳代の踊り手たちが、「自分たちの先輩」である80歳代から90歳代以上の高齢者たちへエイサーで慰問をしていることを意味し、平敷屋エイサーの演じる側と観る側における年齢層の幅のひろさがみてとれる。そして、同保存会は、2009年3月には、国立ハンセン病療養所「沖縄愛楽園」においても、「エイサー慰問公演」を実施している（平敷屋エイサー保存会 2013）。

さらに、結成30周年をむかえた2013年8月18日、沖縄県平和祈念財団主催の「旧盆エイサー奉納」として、糸満市摩文仁の平和祈念公園内にある国立沖縄戦没者墓苑や「平和の礎」前で演舞をおこなった。同保存会の仲尾清治会長は、「恒久平和を願い平敷屋エイサーを披露することができた」と地元紙の取材に応じている⁴⁵。この際、保存会は、「いつの世までも皆で平和を祈りましょう」とうたう「平和世祈り」の演目を踊った⁴⁶。この曲については、後で詳述する。

2014年11月10日、同保存会の25名は、福島県いわき市を訪問し、作町と豊間にある災害公営住宅にて、津波被災者のための慰問演舞をおこなった。両団地のほか、ショッピングセンターなど、1日に6回の演舞をこなした。この直前に、千葉県で開催された「日本の祭り in 成田」へ招待されたのを機に、福島まで足を伸ばした。これは、エイサーの起源にかかわったとされる僧侶の袋中上人が、いわき出身という縁から、同保存会が東日本大震災による被災者の慰問を計画した。保存会は、袋中上人が開山したとされる同市内の菩提院でも踊り、交流した⁴⁷。

2017年、文化庁の「平成29年度文化遺産総合活用推進事業(地域文化遺産活性化事業)」交付が決定された。これをうけ、同保存会を中心に、「うるま市伝統文化継承基盤整備事業実行委員会」が結成された。約800万円の交付金のもと、平敷屋エイサーの踊りの型や動作をDVDに収録する。また、こどもたちむけのエイサー指導の教材としても活用したり、プロモーション用のDVDも作成し、保存会のさらなる活性化につなげていきたいと

⁴⁵ <https://ryukyushimpo.jp/photo/preentry-211257.html> [『琉球新報』（2013年8月19日）、「平和願い奉納演舞：うるま市平敷屋エイサー」] を参照。同保存会は、2014年、2015年、2016年にも、この催しで演舞をおこなっている（<http://heiwa-irei-okinawa.jp/index-all-events.html>、公益財団法人沖縄県平和祈念財団、「財団主催のイベント情報」、「実施済みのイベント」）。

⁴⁶ <http://www.qab.co.jp/news/2013081945618.html> [琉球朝日放送報道制作部、「ニュースQプラス」（2013年8月19日）、「平和祈念公園でエイサー奉納 戦没者への供養と祈り」] を参照。

⁴⁷ http://www.minpo.jp/pub/topics/jishin2011/2014/11/post_10991.html [『福島民報』（2014年11月11日）、「心込めた踊りで激励：沖縄・平敷屋エイサー保存会がいわきの災害公営住宅を慰問」]、および<http://www.okinawatimes.co.jp/articles/-/46484> [『沖縄タイムス』（2014年11月25日）、「被災者の心に響け：平敷屋エイサー、福島慰問」] を参照。

考えているという⁴⁸。

この事業の一環として、同年9月6日に、平敷屋小学校の5・6年の児童が、毎年、運動会で踊るエイサーにおいて、保存会のメンバーが指導する様子が撮影された。同校では、約30年間にわたり、児童が平敷屋エイサーの演舞にとりくんでおり、保存会も2000年頃から踊りを教えている。撮影では、正しい服装かどうかの確認からはじまり、腕の高さや足さばきなどを確認し、型を修正していった。

以上のとおり、平敷屋エイサーは、さまざまな機会、場所で演舞を展開してきている。次章では、フィールドワークから知りえた、青年会および保存会の活動を具体的に論じていく。

5 米軍基地とエイサー

5-1 平敷屋におけるエイサーとオスプレイ

筆者たちが調査を実施した2016年、旧暦七月十五日（ウンケー）にあたる8月17日（水）、平敷屋のヒッチャマア（拝所）前の三叉路にて、青年会による奉納エイサーが演舞された。夕方6時頃から東が先に登場し、地謡が3名、ハントー担ぎが2名、テークチリ（パーランクー）が20名、ジーヌー（手踊り）が男性5名と女性8名、ナカワチが11名、計49名での構成であった。続いて、晩8時頃から西が演舞を開始し、地謡が4名、ハントー担ぎが2名、テークチリ（パーランクー）が16名、ジーヌー（手踊り）が男性5名と女性4名、ナカワチが13名、計44名であった。

この奉納エイサーがおこなわれる2日前の8月15日、在日海兵隊は、ツイッター上などで、「在日米海兵隊トップのニコルソン中將により、在沖縄米軍は旧盆期間中の8月15日から17日の間、軍用機による飛行及び武器使用訓練の制限を行います。ただし緊急運用や16日の日中飛行訓練においては制限対象外です。」と発表した⁴⁹。

地元紙の報道によると、奉納エイサーがおこなわれた日の午前9時半頃、ホワイト・ビーチの^{ナカワチ}栈橋で、給油中の米軍の小型揚陸艇から、燃料の軽油約7リットルが海上に流出した。中城海上保安部によると、同11時頃までに、米海軍が吸着マットで軽油を回収した。中城海保によると、油漏れの揚陸艇は、輸送揚陸艦「グリーン・ベイ (USS Green Bay, LPD-20)」に搭載されている船で、栈橋上のタンクローリーから揚陸艇に給油中だったが、揚陸艇のタンクの容量を超えて給油しつづけたのが漏れた原因とみられる。同11時

⁴⁸ http://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkazai/joseishien/chiiki_kasseika/h29_sogokatsuyo/pdf/h29_chiiki_ichiran.pdf [文化庁、「政策について」、「文化財」、「各種助成金・支援制度一覧」、「文化遺産を活用した地域活性化に係る取組への支援」、「平成29年度文化遺産総合活用推進事業について」、「平成29年度文化遺産総合活用推進事業（地域文化遺産活性化事業）交付決定一覧」]、および<http://www.okinawatimes.co.jp/articles/-/145134> [『沖縄タイムス』（2017年9月24日）、大城志織「平敷屋エイサーをDVDに：伝統の型を正しく継承、教材活用へ」]を参照。

⁴⁹ <https://twitter.com/mcipacpao/status/765024982413942788>（在日米海兵隊@mcipacpao、2016年8月15日12時19分、Tweet.）を参照。

15分頃、米海軍から中城海保に油漏れの通報があり、海保職員が現場を調査した。付近海域への油の流出や漁業への影響はないとされた⁵⁰。

エイサーが演舞されているヒッチャマアから、直線距離で約700メートル離れたホワイト・ビーチの桟橋には、佐世保に配属されている米海軍の強襲揚陸艦「ボノム・リシャール (USS Bonhomme Richard, LHD-6)」が寄港していた。奉納演舞が開始される1時間半前の夕方4時半に、ヒッチャマアから約100メートル離れた「平敷屋タキノ公園」にある丘の展望台から、200ミリの望遠レンズのカメラでボノム・リシャールを撮影したところ、その飛行甲板上には、停止中のオスプレイ6機や大型輸送ヘリコプター（「スーパースタリオン」CH-53Eと思われる）2機などが確認できた⁵¹。

このように、既述の在日海兵隊のツイートどおり、実際に飛行はしていないものの、エイサーが奉納される拝所から、1キロメートル以内の距離に、オスプレイなどの米軍用機が待機していたのである。

例年、ウークイの翌日にあたる旧七月十六日は、夕方5時から、集落内の浦ヶ浜公園で、平敷屋青年会の主催により、「平敷屋青年エイサーの夕べ」が開催される。この催しでは、平敷屋子ども会もエイサーを披露する。調査をおこなった2016年度は、8月18日（木）に実施された。来賓などに配布されたプログラム冊子（平敷屋青年会 2016）に記されているとおり、「平敷屋子ども会」、「平敷屋青年会（西）」、「平敷屋青年会（東）」の順で演舞され、さいごには花火の打ち上げがあった。

同プログラムに記載された演舞者たちは、西の青年会は、「ジウテー（3名）、テークチリ（16名）、マヌチャー（2名）、ハントー担ぎ（2名）、旗頭（1名）、ジヌー（男：6名、女：6名）、ナカワチ（8名）^{イリフアー シチグウチ ニンゴウグワ} 計44名」となっていた。そして、西の演目は、「①秋の踊り（入羽）^{イリフアー}、②七月節、③二合小節、④ヒヤミカチ節・高離り節、⑤シューラー節・南嶽節、⑥国頭ジントーヨー（新）、⑦初恋（新）、⑧ドンミカセ、⑨祝節、ちょうぎん（余興）たいまつ舞」であった（平敷屋青年会 2016: 2）⁵²。

東の青年会は、「ジウテー（3名）、テークチリ（20名）、マヌチャー・ハントー担ぎ（2名）、旗頭（1名）、ジヌー（男：6名、女：8名）、ナカワチ（10名）^{ナンダキ クンジキ} 計50名」と

⁵⁰ <http://www.okinawatimes.co.jp/articles/-/57933> [『沖縄タイムス』（2016年8月18日）、「給油中の米軍小型揚陸艇から燃料7リットル漏れる」] を参照。

⁵¹ <https://twitter.com/CFAOkinawa/status/766111351114608640> [在沖米海軍艦隊活動司令部（在沖米海軍(U. S. Navy)@CFAOkinawa）、「USSボノムリシャードが #ホワイトビーチ に寄港し、@US7thFlt のボトロール[原文ママ]に向けて、海兵隊員と機材を積み込みを行っています。#沖縄」、2016年8月18日12時15分、Tweet.]、および<http://www.rimpeace.or.jp/jrp/okinawa/160818wb.html> [RIMPEACE: 追跡！在日米軍、「佐世保の揚陸艦3隻、ホワイトビーチ寄港中」（2016年8月18日）] を参照。

⁵² 「マヌチャー」とは、馬頭をかたどった飾りを、からだの前に付け、その手綱を取る姿で登場する馬舞者（ウマメーサー）、「（新）」とは、「新しい唄（ミーウタ）」、戦後に新しく作られた民謡のことであり、毎年、東西ともに、2曲ずつ、バリエーションをもたせてとりいれている。

なっていた。そして、東の演目は、「①秋の踊り（入羽）、②七月節、③二合小節、④エイサー、⑤梅の香り、⑥肝高の島（新）、⑦芋の時代（新）、⑧貫花・シューラー節、⑨チェーヒャー小、ちょうぎん（余興）京太郎」であった。（平敷屋青年会 2016: 2）。

演舞場の正面中央に建てられたテントには、長机とパイプ椅子が置かれ、司会と来賓席がもうけられていた。招待客には、欧米系の米軍基地の幹部（司令官）とその妻子たち、通訳、および海上自衛隊の幹部（沖縄基地隊司令一等海佐）たちの姿もあった。基地関連の補助金からの予算があるため、今回のイベント用の机や椅子はレンタルし、フィナーレには豪華に花火までできるという。

特筆すべきこととして、子ども会エイサーの演舞の最中、夕方5時58分頃、「MARINES」と印字された米海兵隊の中型汎用ヘリコプター[「ヴェノム（UH-1Y Venom）」と思われる]が1機、爆音とともに飛行していった。300ミリの望遠レンズのカメラで撮影した写真をよく見ると、この軍用ヘリは、両側のドアを全開にしており、作業をしている乗組員の姿がうつっている。これは、輸送中や移動中ではなく、あきらかに何かの演習中だったと思われる。地上では35名のこどもたちがエイサーを舞い、その頭上では、攻撃用のロケット弾ポッドがそなわった米軍ヘリが舞っていた。

さらに、西の青年会が演舞していた夕方6時45分には、オスプレイが1機、会場の上を轟音とともに飛行していった。旧盆明けの平敷屋では、まさに、頭上ではオスプレイが、地上ではエイサーが舞っていたのである。

エイサーを演舞していた平敷屋の子ども会や青年会のメンバーたちは、頭上に米軍機が飛行していても、中断せずに踊りつづけていた。このように、沖縄以外では「非日常」的な場面は、ホワイト・ビーチと隣り合わせに暮らす平敷屋の人びとにとっては、「日常」となってしまうている。

5-2 「ホワイト・ビーチ」でのエイサー：白い砂浜とオスプレイを背に舞う

2017年4月22日（土）と4月23日（日）、「第26回ホワイト・ビーチ・フェスティバル（Annual White Beach Festival）」が、在沖米海軍〔在沖米海軍福利厚生課、(Navy MWR, Okinawa)〕と海上自衛隊沖縄基地隊の主催で開催された。フェスティバル公式のウェブサイトには、「ゲートにて写真付身分証明書（運転免許証、パスポート等）を提示して下さい。手荷物は中身を検査させていただく場合もあります。」と注意書きされていた⁵³。

⁵³ <https://www.facebook.com/events/1841044512802063/> (Navy, MWR, Okinawa 公開・主催者、「26th Annual White Beach Festival」、2017年4月22日、23日、Facebook) 参照。『平敷屋字誌』（平敷屋字誌編集委員会編 1998: 194）には、既述のとおり、1990年の第1回目と翌年の第2回目と思われる「ホワイトビーチ・カーニバル」に、保存会が参加して踊っている。2016年度は、4月23日と24日に開催予定だったが、熊本・大分の大地震のため、9月24日と25日に延期され、同保存会と東の青年会が演舞している。保存会メンバーの話によると、フェスティバル担当者からの出演依頼により、演舞してきているとのことである。

実際、筆者（城田）がレンタカーでゲートに着いた際、「境界」と道路にペンキで書かれた先に設置されている検問所付近には、ライフル銃で武装した米軍憲兵隊(military police, MP)たちが、仁王立ちをしており、緊張した雰囲気であった。しかし、日本語が話せる自衛隊員が、簡単にあいさつをかわしただけで、身分証提示は求められなかった。

初日は、雨と風がつよい悪天候のため、来場者はすくなかったが、二日目は晴天となり、子連れや孫連れファミリー、カップル、福祉車両で団体で訪れている車椅子利用者たちもいた。地元の中学生たちは、自転車や徒歩で来ていた。

ゲートいりしたあとは、係員に誘導された駐車場に車を止め、「軍用機展示(Static Display)」の会場へ徒歩でむかった。プラスチック製の簡易な柵で囲まれているその展示場の入口においても、セキュリティ・チェックがおこなわれており、簡単にだが、かばんの中身を兵士にみせなければならなかった。

軍用機のディスプレイでは、中央におかれた目玉のオスプレイ⁵⁴をはじめ、米空軍の戦闘捜索救難ヘリコプター「ペイヴ・ホーク(HH-60 Pave Hawk)」、小型高速無人対ミサイル用標的機⁵⁵、戦車、米海軍の消防車、陸上自衛隊の「03式中距離地对空誘導弾（発射装置）」などが展示されていた。

初日の「エンターテイメント」のプログラムは、ハワイアン、ロマニ音楽とダンス、ヒップホップ、「琉球忍者ショー」、アフリカン・ドラム、ファンク、ファイヤー・ダンスなどとなっていた。二日目は、平敷屋エイサーからはじまり、フィリピン系のバンド、ファンク・ソウル、ラテン・ミュージックなどであった。くわえて、二日目の正午から、「ハーリー競争(Dragon Boat Race)」⁵⁶と「モーター・ショー」もおこなわれた。

平敷屋エイサー保存会のメンバーは、正午に公民館に集合し、演舞の衣装に着替えてから、保存会会長の運転で、「平敷屋公民館」と記されたマイクロバスで来場した。オスプレイなどの軍用機展示の会場とは少し離れたビーチ沿いの広い道路に、特設ステージが組まれていた。その舞台前には、音響システム操作用のテントが建てられ、その屋根には、「COMMANDER, FLEET ACTIVITIES, OKINAWA Navy MWR, CATERING」（在沖米国艦隊活動司令部、海軍福利厚生課、ケータリング）と英語表記で印字されていた。

⁵⁴ 本機は、普天間基地に所属する第265海兵隊中型ティルトローター機飛行隊（VMM-265）であり、機体には「MARINES VMM-265」、尾翼に「竜 8032 EP 09」と印字されていた。パイロットたちによって、オスプレイ・グッズが販売されており、オリオン・ピールを模したデザインで「竜竜竜 FOR YOUR HAPPY FLIGHT Dragon」と印字されたものや、「はい オスプレイ 普天間（「オスプレイNO」Tシャツへのリアクション）と記されたTシャツ、濃紺の半袖シャツに、白いオスプレイ模様が全体にプリントされたもの、ワッペン、マグカップ、「V22からの北斎へのオマージュ」と書かれた富士山を背に飛行中のオスプレイの水彩画などが売られていた。

⁵⁵ 英語では、Pacific Missile Range Facility, Ship Deployable Seaborne Target (SDST), BQM-74E, Aerial Target。

⁵⁶ 旧五月四日、沖縄島などでおこわれる爬竜船（はりゅうせん）競漕の祭りで、航海の安全や豊漁を祈願する。

保存会の演舞時間は、午後2時15分から30分間となっていた。演舞者たちは、地謡4名、ハントー担ぎ2名、テークチリ8名、ジーヌー男役の女性4名、女役4名、進行・指笛1名、合計23名であった。演目は、①秋の踊り（入羽）、②二合小節、③中作田節、④沖縄メンソーロー、⑤桑むい節、⑥平和世祈り、⑦白雲節、⑧ケーヒットゥリ節（出羽）となっていた。とくに、ここで注目したいのが、「平和世祈り」という曲である。この日は、4番までであるうちの1番と3番のみ、約2分間、演舞した。その歌詞は、以下のとおりである⁵⁷。

1、
戦世の沖縄
忘てい忘しららん
罪ねらん人ん
命散り果ていてい
世界ぬ人々よ平和世祈り

3、
戦にちけみそな
原爆水爆ん
あわり悲しさや
広島長崎ん
世界ぬ人々よ平和世祈り

（日本語試訳）

戦争時代だった沖縄を
忘れてはなりません。
罪のない人びとの
命でさえも、散り果ててしまったのです。
世界の人びととよ、平和な世を祈りましょう。

戦争には、二度と使わないでください、
原爆、水爆を。
哀れみと、悲しみは、
広島、長崎に。
世界の人びととよ、平和な世を祈りましょう。

この曲は、既述の「姫百合の歌」を作詞・作曲したとされる吉野勇吉がつくった、と保存会の仲尾会長は話してくれた。吉野は、1926（大正15）年、平敷屋で生まれ、東の青年会で活動し、1974年から1994年までの20年間、勝連村長・町長（1980年から町へ移行）をつとめた。また、1996年当時、平敷屋地区の軍用地主総会会長であった（平敷屋字誌編集委員会編 1998: 118, 406, 431）。

この曲がつくられた正確な年代や背景などは不確かとされ、仲尾会長が、青年時代（1967年頃と思われる）、東の青年会が踊っていたという⁵⁸。以降、踊られていなかったが、2000年の「国民文化祭inひろしま」への出演を機に、「昔やっていたこの曲をほりおこして復活させた」という。この曲は、保存会だけのレパートリーとなっており、青年会は演舞しないという。

2008年から現在まで、第5代目をつとめる仲尾会長は、1947年生まれで、かつては西の

⁵⁷ 平敷屋エイサー保存会の仲尾会長より、この曲が収録されたCD-Rと、ワープロ書きされた歌詞のコピーを拝受した。歌詞の日本語への試訳は、筆者による。

⁵⁸ この曲の由来の詳細に関する調査や保存に関しては、「平成29年度文化遺産総合活用推進事業」でおこなっていく予定であるという。

青年会に所属してエイサーを踊っており、38歳の頃から保存会には入り、書記をつとめるなどの活動をつづけてきている⁵⁹。戦後、仲尾会長の父や兄は、「軍雇用」でホワイト・ビーチ内の「護岸工事」にたずさわったり、兄は「基地内のコック」として働いていたこともあるという。

今回、原子力潜水艦が寄港したり、オスプレイなどの軍用機が展示される基地内のイベントで、「平和世祈り」が舞われたのは、アドリブ的ではなく、事前に、30分間で構成されたプログラムにふくまれていた。しかし、筆者たちがこれまでみてきた保存会の演舞（2003年のハワイ公演、2016年の「たかはなり・島あしび」）では、踊られてはいない。今回、ホワイト・ビーチで舞った理由を仲尾会長へたずねたところ、「それは、自然に。ここには、『ガイジン』もいるから。『いつまでも平和で、原爆のない世の中で』、と祈る気持ちから。」と話してくれた。また、去年の同フェスティバル出演時にも演舞したのかを確認したところ、「去年は、やってないはず。いやあ、やったかな？」との回答で、ホワイト・ビーチのフェスティバルへ出演する際には、かならず演舞するときめているわけではない様子であった。

既述のとおり、もともと、「平和世祈り」は、1960年代頃に、第二次世界大戦での沖縄戦や広島・長崎への原爆投下、水爆実験などがくりかえされないことを願ってつくられた。そして、当時、青年であった現在の保存会メンバーたちによって演舞されていた。しばらくのあいだ、踊られなかったが、2000年の広島での演舞をきっかけに復活され、沖縄の平和祈念公園での戦没者慰霊行事などで舞われてきている。さらに、この曲が誕生してから約50年たった現在も、かつては20歳代で今は70歳代の平敷屋エイサー保存会の演じ手たちによって、踊り継がれている。しかし、米軍基地内では、毎回、演じられるものとはきまっておらず、状況におうじて、演舞されている。

このようなホワイト・ビーチにおける平敷屋エイサー保存会による踊りは、なにか特定の固定化されたイズム（主義主張）にもとづくものではなく、この地域固有の社会的・歴史的な枠組からうみだされるフレキシブルな実践といえる。これは、「自然な流れ」であり、「自然な動き」ととらえることができる。そして、この「流れ」や「動き」は、沖縄に特有とされる多様な文化を織りまぜる「チャンプラリズム」と重なってくる。照屋林助は、沖縄の文化的ないとなみとは、「『チャンプラリズム』であり、ことさら『チャンプライズム』としないのは、何万年も一定のリズムで繰り返されてきた潮の流れだから」と述べている（筑紫・照屋 1997: 175）。

平敷屋エイサー保存会の舞台背後には、日米の軍艦や艦艇が浮かんだホワイト・ビーチの「潮の流れ」があった。舞台上には、ハントー担ぎたちが「ホワイト・ビーチの風〜、平敷屋の風〜」と言いながら、暑さしのぎのために、踊り手たちにむかってあおいでいたうちわからの「風の流れ」があった。

⁵⁹ 保存会の徳村春昌（シュンショウ）初代会長は、現会長の義兄の父親であり、戦前は青年団長、保存会結成当時は、農業協同組合長をつとめていた。

ホワイト・ビーチでの平敷屋エイサー保存会による演舞の直後、次の演目との合間に流れたBGMは、映画『フラッシュダンス』の主題歌でアイリーン・キャラ作詞・唄による「Flashdance...What a Feeling」（1983年）であった。大音量で会場内に流れていたこの曲のサビの部分では、「今、わたしは音楽になったの。リズムになったの」というバック・コーラスがはいる。この曲をあの会場で聞き、「フラッシュ」した（思い浮かんだ）のが、この「チャンプラリズム」であった。

ホワイト・ビーチ・フェスティバルという場合は、上記のエンターテインメントの演目だけではなく、会場内の屋台も、沖縄料理とアメリカン・フードをはじめ、タイ、メキシカン、ジャマイカン、そして沖縄系移民によるペルー料理など多種多様なアイテムが混在する多文化的な空間となっていた。さらに、さまざまな声が響きわたる多声的・多言語的な状況でもあった。平敷屋エイサー保存会のメンバーの孫たちが、那覇市内などから応援に来ており、演舞中、「じいちゃん、がんばれえー！」と熱心に声援をおくっていた。保存会の演舞終了後には、司会が「Thank you very much!」と言い、「次は、フィリピン系のロック・バンドによる演奏です」という内容を英語でアナウンスしていた。

平敷屋エイサー保存会のメンバーたちは、終演後、ステージの前で、孫たちも一緒に記念撮影をおこなった。そして、近くで見ていた欧米系の米軍関係者と思われる子連れ夫婦が、テークチリたちに、英語やジェスチャーで撮影を依頼していた。

演舞後、保存会メンバーたちは、『フラッシュダンス』の曲が流れる会場を駐車場まで戻る途中、衣装を着用したまま、パーランクーや三線、酒甕を持ちながら、「米海軍第7艦隊揚陸部隊、第7遠征打撃群、第76任務部隊、『勝利は海から』」と英語表記⁶⁰された鳥居をかたどった看板の前を歩いていった。

この日、公民館へ戻るバスの発車まで、30分間ほど自由時間があつた。アメリカン・サイズの持ち帰り用ピザ2箱を手に、最後にバスへ戻ってきたジューの女性二人は、集合時間が過ぎていたため、「アイ、うちのことを、待っていたわけ？アイ、アーイ。うちらも、このピザ買うのに、40分も並んで待たされたわけさあ。こどもたちに、『みやげに、アメリカン・ピザ、買ってこようね』って約束していたからに」と言いながら、バスへ乗り込んでいった。そして、その「平敷屋公民館」のマイクロバスは、ディスプレイされているオスプレイなどの軍用機の前を横切って、自分たちの集落へと戻っていったのである。

6 おわりに

以上のとおり、本論文では、平敷屋におけるエイサーの特徴と米軍基地とのかかわりについてみてきた。平敷屋エイサーの特徴は、第一に、青年会が、西と東の二組に分かれ、それぞれが特徴をもちながら、拮抗性をたもっている。第二に、子ども会、青年会、保存会があり、6、7歳頃から70歳代までの踊り手たちが、それぞれの立場におうじて、多様な

⁶⁰ 英語表記は、“COMMANDER AMPHIBIOUS FORCE SEVENTH FLEET, EXPEDITIONARY STRIKE GROUP SEVEN, TASK FORCE 76, ‘VICTORY FROM THE SEA’”。

活動をくりひろげている。第三に、青年会と保存会も、演舞スタイルの現代らしさと伝統らしさなどの面において、適度な緊張感をキープしながら、平敷屋エイサーを継承している。

保存会の仲尾会長は、「平敷屋のエイサーも、当然、変わってきている」と、伝統の変容していく状況を認識している。「青年会のテークチリのパチの打ちかたも、唄のうたいかたも、自分たちとは違う。昔、自分たちの青年時代は、今のようにナカワチの人数は多くなかったし、顔を白く塗ったりもせず、髭^{ひげ}だけ描いていた。」と、青年会エイサーの変遷について話してくれた。このような状況をかんがみ、文化庁に予算を申請し、平敷屋エイサーの映像を記録し、未来のこどもたちへ継承しようという事業にとりくむようになったという。

さらに、平敷屋では、旧盆における奉納演舞の場所から1キロも離れていない軍港にはオスプレイをふくむ米軍機・軍艦などが寄港し、その翌日の「平敷屋エイサーの夕べ」では子ども会や青年会の演舞中に、その頭上をオスプレイなどの軍用機が飛び、保存会が出演する「ホワイト・ビーチ・フェスティバル」ではオスプレイもディスプレイされていた。これほどまでに、オスプレイとエイサーの物理的距離が近くなっているというのも、平敷屋特有の状況といえる。

「オスプレイとエイサー」。つまり「軍用機と民俗芸能」、または「武器と楽器」、あるいは「死と生」のように、戦後沖縄には、本来は同じ場にいあわせない「もの」の並列や、アメリカ対沖縄のときに相反する関係性を象徴するような事象が複数ある。たとえば、既述の終戦直後における「命の祝い」は、奪われた命よりも生きのびた命をまつという「逆転の発想から生まれたスーヅ」（森田 1998: 79）であった。

また、1950年代から1960年代頃の「エイサーコンクール」を撮影したと思われる貴重なモノクロ動画には、当時の観客たちもうつつている⁶¹。そして、日傘を持つ右手の甲に鮮明な黒色で「●」や「■」模様の「針突」^{ヘッジ}（入墨）⁶²をほどこし、白髪を結いまとめている高齢で低身長沖縄女性と、その背後に立つ高身長で黒いサングラスをした米軍関係者の欧米系男性二名が、カメラのレンズを直視するシーンが一瞬であるが記録されている。

そして、1970年の「コザ蜂起」で撮られたと思われるカラー映像では、米軍基地関係者が地元住民を殺傷するような事故を幾度おかしても法的な裁きをくれないアメリカ統治へ異をとるために、沖縄住民たちが「黄ナンバー」の米軍車両に放火する場面がうつつている。その映像では、横倒しにされて炎上する車のそばで、沖縄の人びとが、「カチャーシー」（喜怒哀楽をかきまぜるような踊り）を舞っている⁶³。当時の地元紙の

⁶¹ 沖縄テレビ放送、沖縄テレビ開発、沖縄全島エイサーまつり実行委員会制作・著作のDVD『第60回記念(2015): 沖縄全島エイサーまつり』[2016年、ゴマブックス(発売)]を参照。

⁶² 「針突」とは、琉球王国時代から明治末期まで、沖縄で広くおこなわれていた女性の手の甲や腕への入墨で、成女儀礼の一環などとして実施されていた習慣。

⁶³ NHK、BSハイビジョン特集「笑う沖縄：百年の物語」[2011年2月25日(金)、初回放送、89分]を参照。この映像の出典や撮影場所、撮影者などの詳細は不明のため、今後、さらに調べていきたい。なお、この事件は、「コザ事件」、「コザ騒動」、「コザ暴動」などとも称されている。

『沖縄タイムス』（1970年12月27日、日曜日、5頁）には、「踊る市民ゲリラ」と表されている（富山 1998: 8）。このカラー映像では、上げた両腕を左右に揺らしながら踊っている沖縄女性や、笑顔で舞う男性たちの姿が、一瞬だけだがうつっている。この「踊る女性」は、琉球舞踊や沖縄民謡を演舞する際の髪型である「カンブー」を結びあげ、「ジーファー」（銀製のかんざし）を刺し、紺地の着物で腰に白いエプロンを巻いており、現場近くの民謡酒場などから飛び出してきた唄者のようである。

さらに、2005年から展開されてきている沖縄芸人たちによる舞台「お笑い米軍基地」では、「基地問題」から生じる矛盾を、あえて、「笑い」に転化し、独自のパフォーマンスをくりひろげている。ここでの笑い自体は反権力的、抵抗を示すものではないが、そこでは日本本土やアメリカという存在を排除した自立した空間を緩やかに共有することがおこなわれている。それは、「抵抗する側」と「抵抗する対象」の二分法ではなく、戦略的に自らの場所をその中間領域に一時的に生成させることで、両者を括弧にいれる行為でもある（森田 2014: 69）。

那覇の国際通りでは、「沖縄に本物はいらない！玩具で充分！」という宣伝文句で、オスプレイの模型が売られている。国際通りから、一本はいった「平和通り商店街」では、エイサー用の大太鼓や締太鼓、パーランクーが店外のワゴンに積みあげられて販売されている。そして、その真横には、「米軍放出品」という立て看板や星条旗で飾れた「ミリタリー・ショップ」が並んでいる。まさに、「楽器」と「武器」（使い古された弾薬ケースや軍服、ヘルメットなど）が、「平和通り」で、横並びで売られているのである。

本論文では、主に、平敷屋エイサーが踊り継がれてきた場から、戦後沖縄における米軍基地と民俗芸能とのひろがりとかかわりを考察した。ここでとりあげた平敷屋の事例は、固有のものもあれば、米軍基地と隣り合わせに暮らさざるをえない現在の「沖縄の日常」とも重なっている。

<付記>

本論は、平成27-29年度科学研究費補助金（基盤研究（C））、研究課題：「民俗芸能の観光化にみるグローバル化と再ローカル化に関する研究」（研究課題番号：15K01974）、研究代表者：森田真也、共同研究者：城田愛の研究成果の一部である。本論を執筆するにあたり、平敷屋エイサー保存会のみなさまに多大なご協力をいただきました。謹んで感謝の意を表したいと思います。また、うるま市、沖縄市、嘉手納町、千原などのエイサー関係者のみなさまにもご協力をえています。あつく御礼もうしあげます。

参考文献

大山朝常

1997 『沖縄独立宣言：ヤマトは帰るべき「祖国」ではなかった』現代書林。

沖縄県総務部知事公室基地対策課編

2013 『沖縄の米軍基地』沖縄県。

2016 『沖縄の米軍及び自衛隊基地(統計資料集)』沖縄県。

沖縄国際大学文学部社会学科石原ゼミナール編

1994 『戦後コザにおける民衆生活と音楽文化』榕樹社。

沖縄市企画部平和文化振興課編

1998 『エイサー360度：歴史と現在』沖縄全島エイサーまつり実行委員会（那覇出版社）。

沖縄タイムス社編

1998 『庶民がつづる沖縄戦後生活史』沖縄タイムス社。

岡本純也

1998 「戦後沖縄社会におけるエイサーの展開」沖縄市企画部平和文化振興課（編）『エイサー360度：歴史と現在』沖縄全島エイサーまつり実行委員会（那覇出版社）、53-68頁。

金城 厚

1999(初版1997) 『ヤマトンチュのための沖縄音楽入門』音楽之友社。

川平朝申

1997 『終戦後の沖縄文化行政史』月刊沖縄社。

宜保榮治郎

1997 『エイサー：沖縄の盆踊り』那覇出版社。

久万田晋

2011 『沖縄の民俗芸能論：神祭り、臼太鼓からエイサーまで』ボーダーインク。

城田 愛

2001 「越境する沖縄女性たちの生活誌：戦後の沖縄、ハワイ、米軍基地における踊りの舞台から」『移民研究年報』第7号、145-161頁。

2010 「踊りと音楽にみる移民と先住民たちの文化交渉の動き：多文化社会ハワイにおけるオキナワン・アイデンティティ創出の揺らぎ」石原昌英・喜納育江・山城新（編）『沖縄・ハワイ：コンタクト・ゾーンとしての島嶼』彩流社、97-126頁。

2013 「ボン・ダンスにエイサー：ローカル化した日系・沖縄系の文化」山本真鳥・山田亨（編）『ハワイを知るための60章』明石書店、349-353頁。

千原誌編集委員会編

2001 『嘉手納町 千原誌』千原郷友会。

棚原勇吉

1988 「総務課長時代を顧みて」伊波信光（編集執筆者）『石川市史』石川市（発行所）、1076-1081頁。

筑紫哲也・照屋林助

1997 『沖縄がすべて』河出書房新社。

照屋林助

1998 『てるりん自伝』 みすず書房。

徳山 実

1958 「盆踊りエイサーの由来と其の型・形態および歌詞」[A4サイズ、全9頁、ワープロ印字された冊子のコピー]。

富山一郎

1998 「お国は？」 DeMusik Inter. (編) 『音の力<沖縄>コザ沸騰篇』 インパクト出版会、5-20頁。

鳥山 淳

2000 「収容所と占領」「沖縄を知る事典」編集委員会(編) 『沖縄を知る事典』 日外アソシエーツ、50-51頁。

名嘉山兼宏

2012 「うるま市地名散歩:16」『広報うるま』 No. 83、2012年2月号、11頁。

平敷屋字誌編集委員会編

1998 『平敷屋字誌』 平敷屋区自治会。

平敷屋エイサー保存会

2002 「平敷屋エイサーの由来調査報告書：名護市世富慶での聞き取り調査」[A4サイズ、全34頁]。

2013 「結成30周年記念式典・祝賀会」[記念冊子・プログラム、A4サイズ、全16頁]。

平敷屋青年会

2016 「へしきやエイサーの夕べ2016：響かせ 夏の夜空に！テークとサンシンを南風に乗せて！」[プログラム冊子、A4サイズ、全6頁]。

森田純一

1998 「てるりん：戦後沖縄を笑いで癒したワタブー」 DeMusik Inter. (編) 『音の力<沖縄>コザ沸騰篇』 インパクト出版会、75-86頁。

森田真也

2014 「沖縄の笑いにみる文化の相対化と戦略的異化」『筑紫女学園大学・短期大学部 人間文化研究所年報』 第25号、61-74頁。

2015a 「占領という名の異文化接合：戦後沖縄における米軍の文化政策と琉米文化会館の活動」 田中雅一(編) 『軍隊の文化人類学』 風響社、139-175頁。

2015b 「地域を演出する」 福田アジオ他(編) 『はじめて学ぶ民俗学』 ミネルヴァ書房、61-72頁。

森田真也・城田 愛

2017 「フェンスをこえるエイサー：戦後沖縄における民俗芸能の復興と米軍基地」『筑紫女学園大学 人間文化研究所年報』 第28号、1-14頁。

琉球新報社編

1984 『沖縄大衆芸能 エイサー入門』 琉球新報社。

1998 『沖縄コンパクト事典』 琉球新報社。

Shirota, Chika

1999 “Dancing Beyond US Military: Okinawan Eisaa as Identity and Diaspora,” in *Theatre InSight*, 10 (1): 4-13.

写真



写真1：旧盆の平敷屋青年会（東）の奉納エイサー
ヒッチャマァー（拝所）前にて
（2016年8月17日、森田撮影）



写真2：平敷屋子ども会のエイサー
「平敷屋青年エイサーのタベ」にて
（2016年8月18日、城田撮影）



写真3：平敷屋エイサー保存会の演舞（右端は海自の護衛艦「せんだい」）
「ホワイト・ビーチ・フェスティバル」にて
（2017年4月23日、城田撮影）



写真4：米軍関係者との記念撮影
「ホワイト・ビーチ・フェスティバル」にて
（2017年4月23日、城田撮影）



写真5：オスプレイの展示
「ホワイト・ビーチ・フェスティバル」にて
（2017年4月23日、城田撮影）



写真6：部隊名が記された看板と保存会メンバー
「ホワイト・ビーチ・フェスティバル」にて
（2017年4月23日、城田撮影）

（しろた ちか：国際総合学科 准教授）
（もりた しんや：筑紫女学園大学文学部日本語・日本文学科 教授）